

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アイヌ物質文化はどのような視点から研究されてきたのだろうか：民族学研究と考古学研究とのはざま

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 出利葉, 浩司 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00006026">https://doi.org/10.15021/00006026</a>

# アイヌ物質文化はどのような視点から 研究されてきたのだろうか

— 民族学研究と考古学研究とのほさま —

出利葉浩司

(北海道博物館)

- 1 はじめに
- 2 エピソード—ひとりの古老の語りから
- 3 最近のアイヌ文化研究史と課題について
- 4 アイヌ民具への関心はいつからだろうか
- 5 日本におけるアイヌ民具研究のはじまり—坪井正五郎、鳥居龍藏、N.G.マンローにみるアイヌ研究
- 6 北海道先史時代研究の補助としてのアイヌ研究
  - 6.1 名取武光によるアイヌ物質文化研究とその目的
  - 6.2 アイヌ研究は、考古学研究にどのように利用されたか
  - 6.3 連続性として捉えられたアイヌ文化と先史文化
- 7 考古学方法論としての民族学的知識の応用—土俗学的方法
  - 7.1 日本が学んだ西洋の考古学
  - 7.2 ヨーロッパ考古学における『土俗学的方法』
  - 7.3 文化人類学からの『土俗学的方法』への指摘
  - 7.4 なぜ、土俗学的方法なのか—まとめにかえて

## 1 はじめに

日本において、アイヌの民具はどのように研究されてきたのだろうか。それはどのような問題関心のもとに集められ、どんな研究がなされたのだろうか。とくにその舞台ともいえる博物館においては、どうだったのだろうか。筆者は、ながく博物館で仕事をしてきた。そこでは、アイヌ文化の資料についての展示をおこない、その説明をし、また貸し出しや閲覧などにもなう資料の管理や整理、そして収集もおこなってきた。このような仕事をするなかで、アイヌ民族の「民具」について、まずそれを知ること、そしてより深く調べ、研究することの意義あるいは必要性を感じてきた。その一方で、博物館が収蔵するコレクションについて、なぜそれが集められることになったのかということについても考えてきた。

この小論は、日本におけるアイヌ民具の研究を、とくに考古学の発達と関連づけながら考えてみようとする。そして今日的な観点からも、これまでの研究を見直してみたい。そうすることで、日本におけるアイヌ文化研究が、世界各地でおこなわれている北太平

洋沿岸の先住民文化研究のなかでどのような位置にあるのか、その特徴あるいは共通性を議論するひとつの手がかりを得ることができるだろうと思う。また、わたくしたちは、今後のアイヌ研究、先住民文化研究の一つの方向を見いだすこともできるかもしれない。

まず、はじめに、本稿で、なぜ、考古学との関連で考えることに意義があるのか。そのきっかけとなった一つのエピソードを紹介することからはじめたい。

## 2 エピソード—ひとりの古老の語りから

1935年生まれのカナダ先住民のその女性は、はっきりと、不快感があると主張した。

なんの説明もないまま、数百年どころか数千年の時間的な隔たりを超越して、遺跡から発掘された遺物と現代に暮らす先住民の道具類とを比較すること。時間幅をひろく捉えても近代の先住民文化に属する器物と考古学的遺物とを対比し、その類似性を主張し、そして展示する。そこでの「類似性」がなにを意味するのか。なぜ意味しているといえるのか。その「絡繰り」については、なんの説明もない。このことについてかねてから疑問を感じていたわたくしは、カナダのエドモントンにあるロイヤル・アルバータ博物館の仕事に長く協力してこられた古老に感想を求めた。冒頭の文は、そのときの彼女の回答である<sup>1)</sup>。

とくに先住民の暮らしを巻き込んだまま、「時空間の隔たり」をいきなり飛び越えて発言することについて、先住民の人びとが感じる不快感や違和感を、わたくしは、北海道においても聞いた経験がある。わたくしが勤務する博物館にある伝統的住居や衣服の展示をみたあるアイヌの古老はこういった。「今もこういう、ヨシで作られた住居に住み、アイヌ文様のある衣服を着ている。博物館に展示されているような伝統的な生活が続いている。そう思われるのは耐えられない。」この古老の意見は、そのあと、だから伝統的なアイヌ民具を展示するときには、くれぐれも観覧者に誤解されないよう博物館は注意をしてほしいと続く。

その古老がいったかったことは、自分たちには今の生活があるということだ。北海道に暮らす住民として、みんなと同じ生活があるにもかかわらず、それが理解されないことへの苛立ちであり、また同時に、そのような今日のアイヌの人びとの思いから目を背けて、平気な顔をして十分な説明もないまま、「過去」の器物から時間的な背景を捨象し「アイヌ文化」として恒久的なラベルを貼り続ける博物館への不満でもあったにちがいない。もっとも、時空間のへだたりにたいして感じる違和感については、北海道の博物館が最初に気付いたことではない。たとえば、すでに古谷嘉章も述べていることを指摘しておこう(古谷 1998)。

わたくしがアイヌの物質文化を研究するにあたって、近年、気に掛かっていたもう一つのことは、研究する側とされる側とのミスコミュニケーションである。「研究者たち

は、みんな、わたしたちアイヌの所へやってきては、いろんなことを聞いていく。そして愛想良く帰っていく。しかし、そのあと、なんの音沙汰もない。論文かなにかに発表し、博士にでもなったのだろう。だけど、わたしたちの所で調査をしてどんなことがわかったのか。それを、どこで発表したのか。わたしたちはそれを知ることはできないのか。知ってはいけないのか。どうして自分たちアイヌにもわかるように教えてはくれないのだ。」わたくしが懇意にしている中年のアイヌの男性は、わたくしにこのような疑問をぶつけてきた。

この二つの意見が、わたくしの心の中にあった。研究者が、時空間を超えて調査対象者の文化を眼差すこと、そして調査する研究者と調査される側とのミスコミュニケーション。この二つの体験が本稿の根底にある。

### 3 最近のアイヌ文化研究史と課題について

ところで、アイヌ文化がどのように研究されてきたのか。その研究史については、最近でもいくつかの仕事がある（Yamada 2003 ; Deriha 2013）。また、現在の問題点、将来への課題についても佐々木利和が述べているし（佐々木 2010）、その佐々木に反論するかたちでひとつの博物館における研究を含めた活動の歩みについて大塚和義が述べている（大塚 2011）。2011年には、齋藤玲子がわかい研究者とともに企画した国立民族学博物館でのシンポジウム『国際シンポジウム 温故知新—アイヌ文化研究の可能性を求めて』などもある。それらは、一般的な研究史、狩猟活動に特化した研究史、あるいは現在のわたくしたちのなかにある課題、わかい研究者が将来を見据えた課題などであるが、それぞれ示唆に富むものである。

この報告で、わたくしは、物質文化研究の観点から、アイヌ研究史をながめてみたい。とくに物質文化研究と密接な関係を持つ考古学研究については注意することになるだろう。そうすることで、日本のアイヌ民具研究の、より個別的、具体的な問題が見えてくるだろうと思うからである。それにより、今後の先住民文化研究とくにアイヌ物質文化研究が向かうべき方向性、あるいは北海道での考古学研究の方向性を示唆することができればよいと考えている。

もうひとつ、アイヌ民具研究に重きをおいたのは、アイヌの文化的アイデンティティについての議論とも関連する。1997年に制定されたアイヌ文化振興のための法律「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」は、アイヌ民族のアイデンティティ形成にとって、そしてアイヌ民族が誇りと尊厳を持って今後生きていくために欠かせないものとして、アイヌの文化に注目している。そしてこの法律のもとに、アイヌ民具も注目され、アイヌ民族自身による工芸品の制作などの文化継承活動がおこなわれている。わたくしは、アイヌ民具がアイヌ民族のアイデンティティ

ィの一つの柱となっているこのような現状をふまえて、アイヌ民具研究に注目してみようと考えた。このことは、さらに、わたくしたちがおこなおうとしている研究活動は、なんのための研究なのか？誰のための研究なのか？ということを実際に考えることに繋がってくるだろうと思う。

さらに、本報告では、研究する側と研究される側との実践的な関係にも注目しておきたいと思う。今日の民族学の関心のひとつが、人びとの文化や社会を「どのように眺めるか」という現場においての人間関係性、つまり眼差す側と眼差される側との人間相互の関係にあるとすれば、その実践の流れをたどることによって、これまでの課題、今後の方向性を考えることは、民族学の課題として意味の無いことではないだろうと考えるからである。

わたくしが本発表でとりあげようとする考古学と民族学について、ここで先取りしていえば、たしかに、どちらの研究分野にも、これまで研究を進めるうえで拠り所としてきた「言い分」はあるだろうと思う。民族学研究者は、文化相対主義のもとに複数の文化の平等性、等価値性を説き、文化に優劣はないという。いっぽう、考古学研究者は、先住民社会にある器物の文様や形態にも注目し、それと考古学資料に見られる文様や形態との類似性に着目する。その類似性を根拠に、先史時代にも同じような道具を利用した同じような活動があったことを想定し、さらに先住民社会からの類推として、先史時代の生業、社会まで考えを巡らそうとする。

しかし、今日の民族学的視点に立って考えれば、どちらの研究も、調査する側とされる側の関係性のうえに成り立っている点は注意すべきである。この関係性は当事者同士に見えている場合もあれば、そうでない、可視化されていない場合もあるだろう。いずれにせよ、当事者はこの関係性から逃れることはできないはずである。そして、個々の研究の現場では、研究する側とされる側とのさまざまな関係性が構築される。ここで、わたくしが重要であると思うことは、関係性を構築する以前に、誰が、誰のために、誰にたいして、なにをあきらかにするために、誰とおこなう研究であるのかを確認しておく必要があるということである。

ここで、本稿でつかう用語について述べておきたい。人びとのまわりに存在し、使われる道具類、博物館などが所蔵し、研究や展示に供される資料・標本について、写真や文字記録、音声テープや映像フィルムとの混乱を避けるためと、物質文化資料、いわゆる「モノ」であることをはっきりさせるため「民具」という呼び名を使用する。この民具という単語自体、研究者によりいくつかの定義があるようであるが、ここでは厳密に議論しない。一般的な道具類、器物という意味も含めて使っており、それぞれの単語の互換は可能である。また、そのような「民具」について、ひろく文化の文脈のなかでの「民具」を強調する目的、あるいはより研究色を強調する目的で使うときには、「物質文化」という単語も使っているが、これも厳密ではなくそれぞれ互換は可能である。さら

に、博物館に収集され、登録された民具について、それが明瞭に物質文化資料を意味することがわかるときには「資料」という単語を使う個所もある。

また、民族学と文化人類学との関係について、わたくしは、両者を区別する研究者もいることを知っているが、ここでは、厳密に区別していない。研究フィールドの集合として大きくとらえ、「民族学」の名前で呼んでおくことにした。ここでも、この二つの単語についての互換は可能である。

#### 4 アイヌ民具への関心はいつからだろうか

アイヌ民具研究の出発点をどこにおくかについては、研究者ごとに、さまざまな見解があるだろう。一般的にあって、ある集団の文化の研究についてその出発点を見極めるということは、簡単な作業ではないだろう。このことは、アイヌ研究全般、アイヌ民具研究にもいえることである。たとえば18～19世紀に北海道島を訪れ、その記録を絵画で残した幕府の役人などは少なくない。彼らのなかにはアイヌの民具類を記録したものもいる。1799（寛政11）年に、松平忠明が蝦夷地取締御用掛として蝦夷地警備を任されたとき、同行し、蝦夷地を訪れた谷元旦もその一人で、彼は調査結果を『蝦夷風俗圖式』『蝦夷器具圖式』として残している（谷 1991 復刻版）。彼はそこでアイヌの民具についても重点的に紹介していることから、すくなくとも当時関係者のあいだでは、ひろく民具についてもなんらかの関心を持たれていたと考えることは妥当だろう。

古物や稀少物、美術工芸的な物品を収集するいわゆる好事家と、彼らを相手に物品を販売供給する古物商、古美術商は古くからあった。1904年の北海道室蘭に、すくなくとも複数のキュリオ・ショップ（古美術商）があったことがうかがえる日記がある。明治年間（1904年）に北海道を訪問したシカゴ大学人類学担当教授フレデリック・スター（Frederick Starr）は、そのときの詳細な日記を残している。日記そのものはシカゴ大学図書館 Regenstein Library, University of Chicago に保存されている。北海道訪問部分については小谷凱宣による日本語訳がある（小谷 1994）。2月18日室蘭における記述のなかに、スターは「一軒の写真屋を見つけ、そこでたくさんアイヌ写真を購入した」（小谷 1994: 35）と書いており、当時、すでにアイヌを被写体とした写真の販売が北海道でもおこなわれていたことがわかる。さらに、室蘭で汽車を待つあいだ、「次の『キュリオ』店をちょっとのぞいた。そこにはかなりのものがあった。アイヌのものを買った」（小谷 1994: 35-36）とも、彼は書いている。

アイヌ民具をあつかう古物商は、北海道だけではなく、当時海外に開かれていた横浜にも存在したようだ。1868年、江戸幕府にかわって明治政府が設立され政権を握ると同時に、新政府は近代化を進めるためおおくの欧米人技術者を雇うことになる。スターの来道より遡るが、明治政府に招かれ北海道開拓に力を尽くしたベンジャミン・ライマン

(Benjamin Smith Lyman, 1873年来道) とホーレス・ケプロン (Horace Capron, 1871年来日) が故国へのお土産として購入した民具が、それぞれアメリカ合衆国国立自然史博物館 (National Museum of Natural History, Washington, D.C.) に収蔵されている (小谷 1993: 21-22)。収集時点のことが詳細に記述された彼らの日記や書簡などは、まだ発見されていないようであるが、国立自然史博物館の資料台帳によれば、ライマンが収集した資料18件20点のなかには収集地 Yokohama となっているものが6点存在する。これは現在の横浜市と判断してよいと思うが、横浜と北海道との地理的な距離を考えると、当時の横浜にアイヌの人びとが暮らしていた可能性はきわめて低い。このことは、当時の横浜には、すでにアイヌ器物をあつかう古物商が存在していたことを示唆するものである。

当時招かれた技術者のなかには、日本の先史文化、日本人の起源、アイヌ民族にも関心を持つものもあった。文化の研究者であるなしにかかわらず、アイヌ民具の収集をおこない、本国の博物館へ送るものも少なからずあったことは、すでに指摘されていて (たとえば小谷編 1993など)、このとき収集されたコレクション群については、日本側研究者によって、いま再検討がおこなわれている。ここで先に戻ってスターの場合を考えると、彼は「お雇い外国人」ではないが、人類学者としてアイヌ民具に関心があり、民族学資料としてアイヌ民具をたしかに購入している。とくに1904年のスターの来道は、同年予定されていた『ルイジアナ購入記念セントルイス万国博覧会』 (Louisiana Purchase Exposition) における「アイヌ文化展示」を考えてのことでもあった (Vanstone 1993)。スターは、アイヌ民具はおろかアイヌ文化について「著作」を残してはいないようであるが、スターのような研究者によるアイヌ民具の購入は、数とすれば少数例であったと考えている。なお、筆者は、現在、彼の「講義ノート」類を精査中であるが、そこにも、詳細な記述はみられない。スターは、収集したアイヌ民具などを博物館施設などに販売したことが知られている (小谷・佐々木ほか 1993: 27)。スターは「研究者」であったが、彼の民具収集の意図については、あらためて考えて見る必要があるだろう。

当時、古物商をとおしてアイヌ民具を手に入れた人びとの大多数は、研究者というより、いわゆる趣味人・好事家であった可能性はたかい。このことは、同時に、アイヌ民具についてそれだけ需要があったこと、また、その需要はアイヌ民具に関心を持つ人びとの存在を示しているといっただろう。もちろん、わたくしは、ここで趣味人・好事家や古物商によるコレクションを批判しているのではない。趣味人・好事家など古物商に集う人びとのアイヌ民具に対する意識や関心はそれぞれであっただろうが、彼らが自ら収集の目的や関心のありようを記録として残していない以上、それを確認する手段はいまのところない。推測だが、すくなくとも、彼らは民具の購入・収集にあたって、アイヌ文化にかんするなんらかの学問的な問題を設定し、それを解明するために器物を収集し分析するというものではなかったと思う。趣味人や好事家による古物商をとおしてのアイヌ民具の収集については、たしかにアイヌ民具やアイヌの人びとの存在をめぐ

る関心のあり方を示す一つの例で、当時の趣味人集団の活動やネットワークを考える意味では興味深い、ここではそうした民具収集もあったことを指摘するにとどめ、本論の対象からははずしてかんがえておくことにしたい。

## 5 日本におけるアイヌ民具研究のはじまり — 坪井正五郎、鳥居龍藏、N.G. マンローにみるアイヌ研究

明治年間には、国内にも、東京帝国大学をはじめとして研究機関が設けられ、人間の文化も学術的な研究対象となる。その対象としてアイヌ民族もとりあげられ、アイヌ民具に関心もたれることになる。そうした関心は民具の収集となっていく。この時期を学術的なアイヌ民具研究の開始期としてみよう。そして、この時期にアイヌ民具の調査と収集をおこなった研究者として、まず坪井正五郎をあげておきたい。

坪井は、東京帝国大学理学部を卒業後、1889（明治22）年からイギリスへ留学し1892年の帰国後、理学部教授となり、翌年創設された人類学講座を担当している（斎藤 1971: 3）。考古学者である斎藤忠は坪井の業績について、「もとより、彼の研究の本道は人類学研究であり、考古学も当初は『人類学の中の考古学』として取り扱った」（斎藤 1971: 4）とするが、坪井自身も「人類學トハ人類ノ自然史」としたうえで、「人類學上ノ考古學トハ人類學ノ目的ニ適ヒタル考古學デゴザリマス、太古人民ノ生活ノ有様、開化ノ變遷體格智識ノ異同、人種ノ移住、古跡古物ノ時代ト場所等ヲ研究スルノガ人類學上考古學ノ本分」（坪井 1889; 斎藤編 1971: 18 復刻版より引用）とのべており、実際「人間の生活や文化を追求することにも意欲を示した」（斎藤 1971: 3）ようである。

しかし、坪井の活動は、それまでの好事家的収集を批判し、ひろく人類学的見地にたち、考古学資料、民族学資料を収集していくことになる。それまでの「風俗史や有職故実的な研究、あるいは珍品収集等、好古的な傾向から脱却することは困難」であった当時の「風潮の中にあつて、坪井の考古学研究の態度は、力強く刺激をあたえ」（斎藤 1971: 5）たようである。坪井も「若しも昔の事さへ云へば直に夫れが考古學、古物の事さへ云へば直に夫れが考古學と云う様に思ひ、考古と好古との別も辨へず、考古學と史學と何所が違ふかも知らずして、漫に考古學考古學と云ふ人が有つたならば、考古學は實に其人の爲に踏み潰されたと申しても宜しい」（坪井 1897; 斎藤編 1971: 30 復刻版より引用）と手厳しい。

その一方で、坪井は、考古学資料や民族学資料に、境界的な意義を設けず「無作為的に」収集したのではない。坪井は、『考古學と土俗學』と題する論文のなかで、考古学と土俗学との関係にも触れ、それらを峻別している。「人類歴史中不明、曖昧、朦朧、暗黒なる部分も土俗學と考古學との輔けに因つて大に明かにする事が出来、特に肝要にして且つ面白き元始社會人類の有様は比較土俗學と先史考古學との合力に因つてのみ窺ひ知る事が出来」、「是等人民の風俗習慣の比較研究を爲し然る後に古物を見る時には其使用

法も、製造法も、之を造り之を用ゐたる人民の有様も、大に明かにする事が出来ます」(坪井 1892; 斎藤編 1971: 36-37 復刻版より引用) としたうえで、たんにその連関を述べるだけでなく、「土俗學と考古學とは、別々に修めても充分の面白味がございますが、併せ修めれば益々面白味が深く成ります」(坪井 1892; 斎藤編 1971: 40 復刻版より引用) と、わかい学徒に両方の学問を学ぶことを勧めている。実際、坪井は民具資料を収集しており、それらは東京帝国大学に収納されていた。長谷部言人は、東京帝国大学理学部人類学教室の収藏品目録ともいえる『内外土俗品圖集』(長谷部 1941) を著しているが、そのなかにも収集者としての坪井の名前がみえ、アイヌ民具を収集していたことがわかる。

それでは、坪井のこのような研究姿勢は、どのように実践されていたのだろうか。たとえば、『未開人種製作品の意匠』(坪井 1910) と題する論文の中で、坪井は、北海道、樺太のアイヌ民具を含め、北米、南太平洋のほか、台湾などに居住する諸民族の民具について比較しつつ解説している。アイヌの民具では、木製盆、イクパスイ、マキリなどを例にあげ、また神への祈りについても民族誌のレベルから説明している。坪井は、アイヌ文様の特徴を説明するために木製盆を例に、そこにみられる「並列模様」をアイヌ民族が好む文様とし、これと日本人の好む「散布模様」との相対的な対比を試みている(坪井 1910: 151)。また、アイヌの木彫りにみられる「ウロコ彫り」についても、「アイヌ自身に鱗の形として拵へて居る」として、これを「魚といふものはアイヌに取つては命の親であるから大切なものとして模様にする」と、アイヌ民族の生業との関連で説明している(坪井 1910: 151-152)。ここには考古学遺物にみられる文様への言及もそれとの比較もない。また、イクパスイについては、当時一般的にいわれていた髭を上方に上げるということよりも、「神に酒を捧げるのに用ふるのが第一」であり「其用の方がアイヌに言はせると肝要なもの」(坪井 1910: 153-154) とアイヌの考えを紹介し、説明原理としてそれを優先させている。

このように複数の民族の民具を説明しながら、「物を作るのにあてどもなしに勝手次第に作るのではなく、模様を付けるのでも横縦十字とか、簡単でなしに種々なものを選んで作ることが能く分る」(坪井 1910: 165) とし、結びとして「意味が分らずに見ますと何處の人でも自分の見慣れたことが正しく、他所のすることは間違つて居るやうに思ふのでありますが」と注意を促したうえで、「其の土地に行つて聞いて見ると立派な理屈がある」とする(坪井 1910: 165-166)。さらに自分たちとは異なった人種や風俗をもつ人びととの出会いについて、「強ひて自分の意を通さうとか、其國の風俗を間違つて居るやうに思つて押付けると、些細なことで感情の齟齬に依つて甚しい損失をすることが生ずる」(坪井 1910: 166-167) とも述べ、文化相対主義的な結論へと導いていく。

この坪井の論文では、民具そのものについての説明に重点が置かれ、それをとおした坪井なりの文化や人びとへの眼差しが述べられている。日本を取り囲む他の地域の民族的な状況がよくわかつてはいなかった当時においては、まず、個々の民具がどのよう

な道具なのかを調べ、それを知ること、そして記載していくことが研究の第一歩だったと推測できる。そのような状況下において、民具についての坪井の解説は卓越したものであったと推測する。くりかえすが、考古学資料との比較は一切おこなわれてはいない。

また、このような坪井のアイヌ民具に対する見識は海外にも知れ渡っていたようであり、アイヌ民具の収集を目的として北海道を訪問した研究者のなかには、先述したスターのように坪井に面会を求めている例もある（たとえば小谷 2004: 111）。これも、坪井のアイヌ文化および民具にたいする知見が、当時としては卓越しており、それを求めて人びとが集まってきたものと考えることができよう。

坪井におかれて、おなじ東京帝国大学を舞台にアイヌ民具の収集、研究をおこなった人物について、もうひとり鳥居龍蔵をあげておきたい。鳥居は1899（明治32）年に「東京帝國大學の命を奉じ、北千島に渡航し、人類學的調査を」（鳥居 1903: 1）実施しており、その報告書を日本語（鳥居 1903）とフランス語（鳥居 1919）とで発表している。大林太良によれば、「日本語による彼の『千島アイヌ』（吉川弘文館、1903年）は研究史、地名、人名、人口、言語と考古学の一部を記すのみの前篇だけが単行本として公刊され、彼が予告した、民族誌的記述のほとんど全部と、考古学的報告のおおくと形質人類学的報告をのせる予定の後篇は遂に出版されずに終わ」（大林 1976: 626）っているという。だから、鳥居の千島調査を概観しようとするれば、すくなくともこの二つの報告書を比較検討する必要があるということになる。

鳥居の調査目的について、鳥居の著書『千島アイヌ』に、坪井正五郎が序文をよせている。その冒頭をそのまま記すと、「千島土人の精細なる調査は啻に千島土人の何者たるかを知るに於てのみならず、北海道本島に棲息するアイヌとの關係、中央主要の石器時代人民との關係を明かにするの於ても、又アジヤ、アメリカ兩大陸北部住民分布の由來を考へ究めるに於ても必要な事業で有ります。」とはじまり、千島アイヌの人びとの現状にふれたうえで、「此時を逸しては調査は行ひ難く成るに相違有りません」（坪井 1903）と書かれている。ここから判断すれば、鳥居の千島調査は、複数の文化にかんする比較を目的とした民族学調査の一環であり、また一種の「緊急」調査であったということになる。

しかし、鳥居の調査は、たんに民具を中心とした生活文化の調査にとどまらない。鳥居龍蔵全集第5巻に収録された仏文報告書（全集では小林知生による日本語訳文として掲載）の解題のなかで、小林知生が説明するように、鳥居報文は、千島アイヌの「形質的特徴をとらえ、たえず移動して狩猟・漁労をつづける不安定な人口の調査から説きおこし、民族学、言語学、考古学、さらに文献の上からこれに照明を投げかけ、はじめて千島アイヌの全貌を明らか」（小林 1976: 685）にしたもので、「神話、説話が採集され、言語が収録され、衣服、装身具、食糧、住居、日用用具、武器類から宗教にいたるあらゆる習俗全般がきわめて精細に報告」（小林 1976: 685）されている。まさに「民族誌的

概観」(大林 1976: 628)であるが、鳥居の関心は、その後、昭和年間にはいるまでつづいていたようである(大林 1976: 628)。

考古学との関連は、『千島アイヌ』(鳥居 1903)のなかでは、第8章「北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑何種族の残せし者歟」、第9章「北千島以外に内耳土器の種類は存在する乎」、第10章「オンキロン人種」と3つの章をさいて、また仏文報告書のなかでも第22章「北千島における新石器時代遺跡」で、述べられている(鳥居 1919 [1976])。とくに仏文報告書では、収集した資料が説明されているが、その内容は、それらが当時の千島アイヌとどのような時間的関係にあるのかが、推定されているのみにとどまっている。考古学資料とアイヌ民具とが機能用途的にどのような関連があるかについて、積極的な考察はないようである。

日本の人類学の先覚者といってよい坪井や鳥居が、実際にどんな講義をおこない、学生をどのように指導したのか、また、そこで民具をどのように扱い、それと考古学とをどのように関連づけたのか、筆者は坪井や鳥居の論文にすべて目をとおしたわけではなく、未確認の点はおおい。この点は今後の課題としておきたい。ただし、以上に述べてきたことが、坪井や鳥居が考えた物質文化研究の方法論、あるいは物質文化研究をとおして眺めた文化観としてよいとするならば、すくなくともアイヌ民具研究にかんして、このような研究の方法や視点がその後の研究者たちに継承されていったという例を、筆者は管見にして知らない。

さて、おなじ19世紀の後半という時期に、物質文化を含めアイヌ文化の研究をおこなった外国人研究者として、ニール・ゴードン・マンロー (Neil Gordon Munro) の名前をあげておきたい。マンローは1863年、スコットランドに生まれ、エディンバラ大学で医学を修めたあと、インド航路の船医として日本へやってくる。日本国政府に雇われたわけではない。彼は、医師ではあったが先史学や人類学にも関心を持っており、途中、寄港した東南アジアでは考古学遺跡の発掘調査もおこなっている。旅行中に体調を壊した彼は、横浜で下船、療養することになるが、この事件はマンローの人生のみならず、その後のアイヌ研究を変えることになったといっても過言ではないだろう。マンローは滞在中、当時、日本の人類学会で議論になっていた日本人の起源論に関心をもち、それを解明すべく自ら先史時代の遺跡の発掘調査もおこなっている(出利葉 2002a)。

やがて、マンローは、日本の先史時代文化とくに縄文文化の解明には、アイヌ文化との比較研究が必要であると考えようになり、アイヌ民具の収集を開始する。とくに縄文文化の土器の文様に注目したマンローは、アイヌ民具のなかでも「文様のあるもの」を中心に集めたようである(出利葉 2002b)。このときマンローは、収集した民具を本国へ送っており、それらの民具は、現在、国立スコットランド博物館 (National Museum of Scotland) に収蔵されている。やがてマンローは北海道の二風谷に移り住むことになるが、そこで彼の妻となった看護師チヨとともに医療活動をおこないながらアイヌ文化研

究を継続していく。二風谷移住以降、彼のアイヌ文化研究は、地域に根を下ろし、地域の人びととの信頼関係に基づいたものとなっていくようだ。マンローの関心も、しだいに、「器物の表面にみられる文様」からアイヌの「心の奥底にある精神文化」へと移っていく。わたくしが、マンローが二風谷に移り住んで以降収集したと推測している民具の内容を精査した結果、信仰や呪術など精神文化に関連するものが目立っていることが判明した（出利葉 2002b）。このことは、まさにマンローの関心の変化をあらわしているといえるだろう。

マンローの死後、London School of Economics の教授であった チャールズ・G・セリグマン (Charles Gabriel Seligman) の夫人ブレンダ (Brenda Zera Seligman) の手により、マンローの調査成果は、彼の手稿や書簡をもとに一冊の研究書にまとめられる。この著作『Ainu Creed and Cult』(1962) には、マンローが収集した民具類の写真もふんだんに盛り込まれている。アイヌの人びとの精神的活動が、マンローの文章だけでなくそこで使用される民具の写真とともに紹介されている。説明も丁寧であり、マンローの関心が民具にもあったことを窺うことができる。逆にいえば、信仰や呪術に使う民具の解説書ということにもなるのだが、わたくしは、この著書について、民具そのものに由来するマンローの学問的関心、たとえば民具の分類や由来、機能分析から出発した研究書と評価することには無理があるだろうと考えている。

残念ながら、彼の研究テーマとそれに関連する民具の収集は、ほかの研究者に受け継がれることもなく、また、彼の研究テーマに関連する議論も拡がりをみせてはいないように思う。マンローの著作は英文であり、また彼の関心も簡単に第三者が当事者のなかに踏み込んでいって調査することがむづかしい精神文化という分野でもあったことがその理由だろう。ただし、彼がその存在を公にしたといわれているアイヌ女性の「お守り帯」(upusor) については、その後の日本人コレクターの収集品のなかに散見されるようになる（出利葉 1997; 2004）。マンローは、1942年に二風谷で亡くなるまで、民具の収集やアイヌ文化研究を続けていたようである。くりかえすが、二風谷時代にマンローが収集した民具の特徴は、なんといっても信仰や呪術に関係する資料の充実である。とくにアイヌの人びとがあまり他人には見せることはなかったと思われる呪術などに関連する民具は重要である。これらの資料は現在、北海道博物館に収蔵されている。

## 6 北海道先史時代研究の補助としてのアイヌ研究

マンローが活動した時期とやや重なるが、アイヌ民具研究の立場からとくに狩猟具について精力的な調査をおこない、研究成果を発表し、あわせて民具を収集した研究者として、わたくしは、北海道大学附属植物園博物館を中心に活躍した名取武光をあげたいと思う。名取が精力的に論文を発表しはじめるのは1930年代からであろう。彼がアイヌ

民具研究に業績をあげることができたのは、彼自身、北海道の考古学にも関心があり、使用方法が不明な考古学遺物の機能や起源などの解明のため、アイヌ民具資料と考古学資料との比較検討を必要としており、そのためにアイヌ文化に関心をもっていただけであると考える。

## 6.1 名取武光によるアイヌ物質文化研究とその目的

名取は、『噴火湾アイヌの捕鯨』（名取 1940: 137-161; 名取 1945に再録, 名取 1974に再再録）の冒頭でアイヌ民具を研究する目的をあげ、それは考古学資料と比較するためであると述べている。名取は北海道全域からアイヌの銚先（キテ）を収集しているが、それは「本道<sup>2)</sup>の先史時代の遺跡から、極めて豊富に発見される遺物と比較する必要」（名取 1940: 137）があったからであるという。名取は、ここで銚先の研究についてのみ触れているが、名取のこの考えは、彼のアイヌ民具研究全体に当てはまるはずである。名取は続けて、そう考える根拠を述べる。「先史時代の文化の研究には、遺跡や遺物から得た資料を正しく分析し、夫れを前提とした綜号的考察を主としてゐるが、北海道が本格的に歴史時代に這入つたのは極めて新しく、口蝦夷にては数百年、千島・樺太にては二三百年この方の事である」ため、「先史時代末期の遺跡や遺物を解明するのに、以上の外に傳承されてゐる原始文化の中、土俗の知識が極めて必要である」（名取 1940: 137）。このことが、名取がアイヌ民具研究をおこなうこと理由であることになる。なお、名取は、その後、この論文を自身の著作集『アイヌと考古学（二）』（名取 1974）のなかに再再録しているので、1974年の時点でも、この考え方は名取自身のなかにあったと考えてよいのだろう。

このことは同時に、アイヌの人びとの生活と北海道の先史文化との「距離感」についての、名取の基本的認識を示していることになろう。名取はべつの論文『アイヌ民族の精神生活』（名取 1942; 名取 1945: 33-61に再録, 名取 1974に再再録。以下は1945から引用）のなかでは、つぎのように述べる。「アイヌの生活にやゝ見るに足る農業が取り込まれたのは、明治以降開拓使の努力の結果」であるとし、「それ以前」のアイヌの人びとは、「殆んど日常生活の必需品のおおくは、山野に狩をし又河や湖や海に漁をする外、季節季節に山野の植物を利用して居つた」（名取 1945: 52）とする。「日常の衣服や什器、祭祀用具等に、本洲や樺太を経た交易品が寶物のような意味で這入り込んで」いたことは認めつつも、「日常の生活品としての大半の意味を持ってゐた食糧關係の物資は、交易によつて得られる量は極めて尠い状態」であるため、「昔のアイヌの生活は、先史時代の人類の生活の延長の観があり、それは「狩獵本位の生活」であつたと結論づけている（名取 1945: 52）。

たしかに名取は、アイヌ文化研究におおくの業績を残していることはまちがいがなく、それを高く評価しなければならない。そのうえで、現在のわれわれが乗り越えなければ

ならない名取の研究の問題点を二つあげるとすれば、つぎの点であろう。まず第一点。名取が述べるところから判断するかぎり、名取は、アイヌ文化それ自体のなかに研究課題を見いだしていたのではなかったということだろう。主目的である先史文化研究の補助としての意味合いがあった。いうなれば間接的なアイヌ文化研究であったといえるかもしれない。ただし、いそいで付け加えれば、名取がおこなったアイヌ文化研究とくに民具研究は多岐にわたっており、しかもきわめて精緻であることは見過ごしてはならない。第二点は、名取が乗り越えきれなかった認識上の課題である。つまり、アイヌ文化、アイヌの人びとへの認識であった。「北海道の私共の極く身近に、然も近年まで續いて居たアイヌ文化は、地理的の事情もあつて、比較的古い形の生活の姿を近年迄持ち續けて居たので、その文化の中には、私共の遠い祖先の生活のまだ一つ前の姿が、極くうぶのまゝで傳へられてゐるものが多い」(名取 1945: 33) と述べているとおり、名取は、アイヌを近代化されていない人びとだと先験的に決めつけており、そうした固定化された認識が研究の開始時点で、彼の認識のなかにあったことがなよりの誤りであった。もちろん、これは名取一人が批判されるべき問題ではない。名取が、自身の研究の目的を北海道先史文化の解明にあるとする一方で、アイヌ文化を「先史時代の人類の生活の延長」(名取 1945: 52) と認識しているかぎり、アイヌの狩猟具と考古学資料とを等距離に置いて眼差すという方法を採用したのは、当時としてはごく当たり前の選択であったといえるだろう。当時の北海道先史文化研究者、アイヌ研究者に共通する認識であり、当時とすればごく当たり前の認識であったと思う。そのかぎりにおいては当時の研究者全体の問題であった。

名取が考古学研究にアイヌ文化の知見を適用した例として、わたくしが気付いた範囲でいえばつぎのものがある。『北日本に於ける動物意匠遺物と其の分布相』は、名取が1936年に発表した論文である(名取 1936; 名取 1972に再録)。彼は、そのなかでオホーツク式土器の紋様を8つの要素に説明したうえで、「縄目紋」の説明の最後に、「樺太式縄目土器の存在は、樺太アイヌの土俗の様な文化的位置に在ると考えられる点が少なくない」と述べ、オホーツク文化期の生活を説明するために樺太アイヌの生活を引き合いに出している(名取 1936; 1972: 135より引用)。また、河野広道と共同で1938年に発表した『北海道の先史時代』(河野・名取 1938; 1972: 141-179より引用)のなかでは、先史時代集落における住居数を推定して、「薄手式縄紋土器期の堅穴は、あまり多数に発見された例がないが、擦紋土器期の堅穴に到っては、数十乃至数百の集団を数へ得る個所が少なくない。これを以て当時数十乃至数百戸の部落が存在して居たとする学者もあるが、十戸以上の集団部落は甚だ稀であつたらしい」とする。続けて名取と河野は、その根拠としてアイヌの例を挙げる。「アイヌには家に死者があつた際に、焼いて別に新しい家を新築する風習があつたのであるから、一個所に数個の堅穴部落があつたとしても、幾百年間には堅穴跡の数が数十以上に達することは甚だ容易であつた」(河野・名取 1938;

名取 1972: 152より引用) と、アイヌの例を引用している。

じつは、名取のアイヌ文化にかんする仕事は、先に述べた名取の「目的」とはうらはらに、アイヌ文化や民具の研究それ自体に当面の課題を見つけだしており、名取は、地方差や系譜それ自体を目的化して精力的におおくの論考を発表していく。くりかえすが、これらの仕事は、先史文化の解明という名取が当初考えていた「目的」を達成するための基礎的作業の意味をはるかに超えている。名取自身、ある時点からはアイヌ文化や民具の研究が目的化していたのかもしれない。

## 6.2 アイヌ研究は、考古学研究にどのように利用されたか

管見の限りでは、1930年代の時期、北方地域を研究する考古学研究者たちは、なんらかのかたちでアイヌ文化にも関心をもち考古学とのかかわりを考えていたようである。名取以外の研究者の例を見てみよう。彼らの研究は、考古学遺物つまり先史時代の道具それ自体の機能や用途の説明や解釈にアイヌの民具を重ね合わせたものがおおかったようであるが、なかには先史時代の社会を考えるうえでアイヌの例を引用したものもある。

戦前の樺太で警察官をしつつ考古学調査をおこない論考も発表した木村信六は、1939年『樺太石器時代の遺跡と遺物概観』（木村 1939; 木村・和田・林 1984: 77-100に再録。以下は1984から引用）を発表し、そこでアイヌ文化との比較をおこなっている。木村は、樺太先史時代人とくにオホーツク文化人の生活様式を考えるなかで農耕の存否について「アイヌとの対話から考へる時は、野生の植物は採集はしたであろうが、オホーツク式土器人は徹頭徹尾、漁撈民であり且狩猟民であつたらう」と述べる（木村・和田・林 1984: 98）。木村なりというよりおそらく当時の研究者に一般的であったアイヌ文化観をオホーツク文化の解釈に適用したものと考えることができる。

もう一人、日本外交史の研究者である稲生典太郎の業績を紹介したい。稲生は、國學院大学を卒業するが、その前後の時期にオホーツク文化を中心とした北方文化研究に興味をもち、論考も発表している。その後、彼は、日本外交史へと専門を移し、北方文化研究者としてのキャリアを終えているため、ここで彼の青年時代の業績を取り上げるのは申し訳ないが、考古学、民族学を踏まえた当時の北方文化研究の一つのありかたを知ることができる例として引用させていただく。稲生は、1934年北海道を一周、翌1935年樺太西海岸・多来加湾、東海岸を、さらに、1936年には平取と多来加湾を再訪、1937年に再び北海道を一周するという精力的な調査旅行をおこなっており（稲生 1997: 175）、各地でアイヌの人びとからも聞き取り調査をおこない、その成果も発表している。

稲生の成果の一つ『樺太アイヌの人形』（稲生 1936; 1997: 101-113に再録。以下は1997から引用）は1936年に発表された論文で、樺太に住む古老からの聞き取りにもとづいた樺太アイヌにみられる人形と、白老の古老からの聞き取りにもとづいたアイヌの鉾についての、興味深い事例を述べている。稲生は、樺太での調査で、異なった民族集団に属

する人びとが同じ住居に暮らす例があることを知り、そこに注目する。一つの例は、オタスにあるニヅフの家にアイヌがしばらく宿泊し漁に従事していたこと。そして、そのアイヌは、自分自身のために、その家でイナウを作っていた事実。もう一つは、東多来加にある樺太アイヌの古老の住居に、北海道の白糠から来た古老が同居していたこと。そして、彼もまた樺太の地で白糠のイナウを作っていた事実。この二つを民族学的論拠とし、これをもとに考古学的事実を人の移動によるものとして解釈している。すなわち、稲生は、「関東地方の縄紋遺跡の特に末期のもの、所謂安行式などの土器に混じて、亀ヶ岡式土器が見出される」という事例の解釈として、人の移動の可能性を示唆している（稲生 1997: 108）。なお、同じ論文中で、稲生は、ある研究者が発した「石器時代の如き蒙昧な時代に、そんなに文化が容易く移動してたまるものか」という意見に対し、それが「今を以て古えを推すから」であると、先入観を戒める発言もおこなっており興味深い（稲生 1997: 109）。

稲生はまた、1951年に発表した論文『江戸時代の文献に現れたるアイヌの農耕について』（稲生 1951; 1997: 77-99に再録。以下は1997から引用）のなかでも、アイヌの農耕に文化的評価をおこない、それを考古学的事実の解釈に適用している。そこで稲生は、まず、「江戸時代のアイヌの農耕は明かに狩漁民族がはじめてその生業の一部に農耕を持ち得た段階を示す」（稲生 1997: 98）とアイヌの農耕を位置づけたうえで、「かかる段階<sup>3)</sup>は、我国石器時代の、少なくとも米作りの弥生式文化が営まれ、又はそれより若干前の段階に於いて、広く各地において経験されたことはほぼ確かな事実」（稲生 1997: 98）であるとする。北海道島で江戸時代ごろのアイヌ社会におこったできごとを2000年近く時間を遡った文化に対比して考えようとしているのである。さらに稲生は、アイヌの農耕を歴史的に意義付け「アイヌが狩漁民族であることを止めて農耕民族になったのは、全く明治年間の開拓以後であり、しかもアイヌ民族の人口激減は実はその飛躍<sup>4)</sup>を余儀なくされたことが最も重大な影響を与えたことも事実」（稲生 1997: 98）であるという認識を示したうえで、「胆振・日高地方の如く、農耕の下地があった地方のみが、よく開拓の進歩に対処して、農耕社会的な生活一般を享受し得て、人口の漸増をさえ示し、他地方アイヌの激減によるアイヌ民族の絶滅をかうじて支えている」（稲生 1997: 98）という考えを示す。また、稲生は、自身のこの認識を、日本考古学に適用して「弥生式文化圏の拡大に伴って、当然惹起されたと想像される幾多の社会的問題の一つの姿を、如実に示している土俗例」（稲生 1997: 98）と結んでいる。

### 6.3 連続性として捉えられたアイヌ文化と先史文化

ところで、当時の研究においては、アイヌ文化についての民族学的調査研究の成果を考古学研究に利用するだけでなく、考古学資料とアイヌ文化との「時間的に直接」な「連続性」や「関係性」で議論されることもおこったようである。たしかに、北海道とい

う地理的な地域においては、本州以南でいう中世の時期まで考古学遺跡が確認できる。だから、そうした時期に属する考古学的事実、すなわち内耳土器や住居についての報告や論考では、必ずといってよいほどアイヌ文化への言及あるいはアイヌ民族の事例との比較がおこなわれている。また、アイヌ民具にみられる「刻印」は注目を集めたようで、それと先史文化との関連が、さまざまな遺物にみられる類似の線刻文様について議論されるなかで指摘されている。

たとえば、林欽吾が1939、1943年に発表した論文が一本にまとめられ再録された『日本北辺の内耳土器』（木村・和田・林 1984: 215-246）や、新岡武彦の『土鍋について』（新岡 1931, 1977b: 32-34）、『樺太の内耳土器』（新岡 1937, 1977a: 40-55）、『北蝦夷図説の土鍋』（新岡 1975, 1977a: 204-209）、馬場脩『日本北方地域及び附近外地出土の『内耳土鍋』に就いて』（馬場 1940a, 1979b: 163-266）などは、内耳土器を論じるなかで時間的に連続するとされるアイヌの例を引用している。おなじく馬場脩は『樺太の考古学的概観』のなかで堅穴住居の解説をおこない、そこで古老からの聞き取りをもとにした樺太アイヌの住居に言及している（馬場 1940b, 1979a: 9-127）。

考古学資料に見られる線刻文様とアイヌの「刻印」とを関連づけた論考として、三つの例をあげよう。新岡武彦は1930年に発表した『北海道『古代文字』研究並に沿革、環状石籬に及ぶ』（新岡 1930, 1977b: 7-20）のなかで、手宮洞窟やフゴッペ洞窟内にみられる線刻について、遼星北斗や平光吾一の説を引用しつつ、アイヌの家紋（エカシロシ）との関連づけをおこなっている。馬場脩は、千島列島出土の遺物を解説した『千島群島出土の狩猟具及び漁具』（馬場 1937, 1979a: 128-173）のなかで、いくつかの骨鏃にみられる「記號」について、「恐らくこれはアイヌのイクバシエー（髭揚げ）の裏に、数箇の異なる記號の附せられたるもの、如く」（馬場 1979a: 159）、あるいは「アイヌの記號に類似せる點を見る」（馬場 1979a: 161）と述べ、アイヌ文化にみられる刻印と対比している。

なお、山田孝子は、研究史をまとめるなかで、アイヌ文化にかんする名取の仕事を紹介しているが、なぜ名取がアイヌ文化の研究を始めるに到ったか、その「目的」についてはふれていない。（Yamada 2003: 84）

## 7 考古学方法論としての民族学的知識の応用——土俗学的方法

1930年代の考古学研究者がアイヌ研究の成果を考古学研究に援用しようという方法を採用したのは、考古学「方法論」からみれば当然のことであった。くりかえすが、わたくしは、このような見方、考え方を批判しているのではない。当時の学問的・社会的背景からすれば当然の判断、流れであったと思う。そこで、次に、当時の考古学方法論の視点から検討しておこうと思う。

## 7.1 日本が学んだ西洋の考古学

当時の日本考古学がモデルとしたヨーロッパの考古学は、どのように本に紹介されたのであろうか。紹介者の一人である浜田耕作は、1916年、日本の大学で最初に考古学講座が置かれた京都帝国大学の初代考古学担当教授であるが、その浜田が1922年に著した『通論考古学』（浜田 1922, 1984 復刻版）において、浜田はフランスの考古学者デシュレット (J. Dechelette, “Manuel d’archeologie prehistorique, celtique, et gallo-romaine” 1908) が唱道していた三つの方法論を紹介している。

その一つが「土俗学的方法」(Ethnographical method)であった。浜田によれば、これは、考古学研究において「古代の遺物が其の用途不明なるか、其の製作の方法明かならざる場合等に於いて、之を類推比較の方法により説明する」(浜田 1922: 153) 方法であるとする。そして「現今同一文化程度にある民族間に於ける土俗品中に、其の比較資料を發見し、之が解釈の鍵鑰を發見すること多く、同一器具技術を有する現存民族中に、其の使用方法の實際を髣髴するを得可し」(浜田 1922: 153) と説明している。その理論的根拠として、浜田は、「同一境遇、同一文化の程度にある人類は、同一若しくは類似の技術を有し、若しくは器具を使用すとの推定より、發足するもの」(浜田 1922: 154) といい、「現時の野蛮人は『現代に於ける古代民族』の代表者と云ふを得可し」(浜田 1922: 154) とする。

ただし、浜田は、「同一民族間に在りても、一地方に於いて既に絶滅せる考古學的器具或は其の用途が、他の地方に於いてはなほ土俗品として残存する場合あり」(浜田 1922: 153) とも書いている。つまり、比較する対象について、かならずしも他の民族に求める必要がないということになる。わたくしは、浜田のこの発言を注視すべきであると考ええる。

## 7.2 ヨーロッパ考古学における『土俗学的方法』

研究史的には時間を遡るが、ロンドン大学先史考古学教授であったヴィア・G・チャイルド (Vere Gordon Childe) の著書によって、実際にヨーロッパで教えられていた考古学方法論がどのようなものであったのか、確認してみよう。チャイルドの著作は日本でも考古学の初期教育においてよく読まれているものと思うが、チャイルドは、1956年に出版されたその著書『Piccing Together the Past, The Interpretation of Archaeological Data』(Childe 1956, 近藤義郎訳『考古学の方法』1964) のなかで、「民族学と民俗学の援用<sup>5)</sup>」(近藤訳1964: 68-75) と題する節を設け、考古学資料と民族学資料(民具)とを比較することの有効性について述べている。

チャイルドは、「産業革命の影響を殆ど受けたこともなく受けてもいない社会集団が、ごく最近まで存在していたし一部では今日<sup>6)</sup>なお存在しているが、そうした集団の産業は機械化されておらず、そのあるものは金属さえも知らない。それはまさに生きた化石

である。」(Childe 1956: 46; 近藤訳 1964: 68-69) としたうえで、彼らの「装備・生産過程・日常生活などに関する知識は、考古学的記録として遺るかさかさの骨の断片に再び肉を与えそれを創った人間集団を再生させるための、もっとも有効な手段を提供する」(Childe 1956: 46; 近藤訳 1964: 69) と述べている。そして、「一般に考古学者は、ヨーロッパの最古に属する時代の資料への正確な対比としては、オーストラリアやアフリカを参照しなければならない」(Childe 1956: 47; 近藤訳 1964: 70) とする。その一方で、チャイルドは、興味深い指摘もおこなっていることを見逃してはならない。

それは、「ヨーロッパの遺跡遺物を機能的に分類する際に、アフリカや太平洋地域で得られる類推よりもヨーロッパ自体からする類推のほうが好ましいことはいうまでもない」(Childe 1956: 47; 近藤訳 1964: 70) と述べ、「自文化」地域での比較の有効性もあわせて指摘している点である。「スコットランド・ノルウェー・あるいはバルカン地方などの辺鄙で未開発な僻地では、明らかに先史時代におけるそれぞれの先祖達が築き上げてきた手工業技術を今日なお温存し」(Childe 1956: 47; 近藤訳 1964: 70) ているというのがチャイルドの理由である。つまり、「環境が先史時代と似ているというだけでなく、一連の伝統によって先史時代の製作物と最近のものとの間に実際の関連が認められることが多い」(Childe 1956: 47; 近藤訳 1964: 70) からであるという。チャイルドのこの「注釈」は、まさに浜田が『通論考古学』のなかで述べていることと同じである。

考古学遺物を比較するとき、どこの、誰の民具と比較するのがよいのか。「単純に、未開民族のものと比較すればよいということにはならない」ということが、すくなくとも浜田やチャイルドによって、すでに述べられていたのである。浜田やチャイルドが述べたことの意義は、すくなくとも日本や英国の考古学界においては、おおきかったはずである。それでは、われわれは、この教えをどのように日本考古学に適用すればよかったのだろうか。あるいは、今後、すべきなのだろうか。もちろんヨーロッパにもさまざまな民族があり、それぞれの文化がある。アイヌを、似た「環境」にある「一連の伝統」によってつながった自国内の文化とみるか、それとも「生きた化石」とみなされる側の文化とみるかについても議論が分かれるところではあるだろう。

残念なことは、今日に至るまで、浜田やチャイルドらのこの注釈が、考古学者によってその意味するところが十分に検討されてこなかったということであると思う。その後、1962年に出版された『世界考古学大系』のうち第16巻は「研究法」にあてられているが、比較研究と項目だてでされた部分に「民族学的考察」があり、そこでは北海道考古学にも造詣が深い考古学者の八幡一郎が「狩猟生活」と題して民族例を紹介している。その冒頭、八幡は、「原始種族は、比較的最近まで世界各地のすみずみに住んでいて、ひろく未開民族の名をもってよばれた。…(中略)…それは、あたかも人類が旧石器時代から新石器時代に到達するまでの数十万年の生活史の縮図のごとき観を呈する」(八幡 1962: 144) と述べている。もっとも八幡は、「このような民族誌的事象を、ただちに先史学的

証述と比較することについては、以前からとかくの議論が存するところである」（八幡 1962: 44）ことを知っていたようであるが、「人間生活の根本を問題にするばあい、零細な考古学資料しかもたない考古学者に、何ができるであろうか」（八幡 1962: 44）と聞き直りとも取れる発言で考古学の立場を援護している。

### 7.3 文化人類学からの『土俗学的方法』への指摘

考古学方法論におけるこのような『土俗学的方法』に注意を促したのは、考古学者ばかりではない。民族学者大林太良は、1965年に、コッパーズ (Koppers) の説を援用しながら、「文化のさまざまな部門（経済・社会・宗教）がいつも同じ組合せであることを前提にして、民族学的な文化複合とある先史文化とを比較し、物質文化の一致から、直ちに文化の他の部門にも、この民族学的な文化複合のそれをあてはめることは方法論に許容できない」（大林 1965; 斎藤 1986: 267-268に再録）と「土俗学的方法」に対して使用上の注意を促している。

しかし、この大林の注意も、北海道考古学やアイヌ文化研究に携わるおおかたの研究者には理解されなかったようである。管見の限り、わたくしも含めて誰一人、これについて議論することはなく、あるいは実践しなかったと思う。大林は、同じ論文中で、「この種の早急な結論は今日<sup>7)</sup>もなお時々見ることがができる」（大林 1965; 斎藤編 1986: 268より引用）と現状への警鐘を鳴らしていたことも、あわせて指摘しておきたい。

### 7.4 なぜ、土俗学的方法なのか——まとめにかえて

わたくしが、考古学のこの『土俗学的方法』にこだわるのは、日本とくに北海道においては、アイヌ文化の研究と考古学研究が無関係ではなく、むしろ非常に近い位置にあるというおおくの考古学研究者の発言があり、それを重く考えているからである。とくに、これまで「ミッシングリンク」とされてきた「擦文文化」と「アイヌ文化」との間隙を埋める、14～16世紀と推定される遺跡の発掘が近年増加しており、考古学研究者があらためてアイヌ民具に関心をもつ一方で、博物館展示などにおいて「北海道の歴史」を展示することが増えてきているという具体的事実も、わたくしが「土俗学的方法」に注目する理由の一つとなっている。

ところで、わたくしはこれまで「土俗」という語を、そのまま引用してきた。この言葉に対し、今日一般に使用されていないことを理由として、木下忠は「民俗学的方法」あるいは「民族学的方法」と言い直すことを推奨している（木下 1967; 斎藤編 1986: 209に再録）。このことをここで発言しておきたい。

たしかに、先人も主張するとおり、考古学における「民族学的方法」は、魅力的であり、また有効な方法でもあるだろう。しかし、考古学的資料と今日の民族例を比較するという、その比較の「前提にあるもの」はなんだろうか。そのことを十分に議論せず、

表面的に観察された結果だけをもとに、結論を急ぐのはどうだろう？たとえばアイヌ文化の要素の詳細な分析あるいはその歴史的過程を十分に検討せずに、比較しようとする時間的に隔たった二つの文化を「同一境遇」「同一文化程度」と見なす文化観は認められるだろうか。なぜ、比較が可能となるのかということに考えが及ぶとき、意識するしないにかかわらず、そこに「同一文化程度」という文化観が潜んではいないだろうか。あるいは「進んでいる—遅れている」といった進化論的な価値観が隠れているのではないだろうか。さらにそれが無条件で文化的な優劣観と結びつくと、きわめて危険な思想となりかねない。

現代に生きる相手の文化を尊重し、それに敬意を払うと発言し、文化的には平等であるという文化観をもちつつ、その一方で、それを過去の文化と「同一文化程度」と見なすという文化観。この二つの文化観を、どのようにして同時に満足させることができるのだろうか。そして、そのことを、どのようにして、アイヌの人びとを含め関係する人びとに説明できるのだろうか。実際、考古学者により書かれた論文でこのことに注意を払っているのは、管見の限りではあるが、国内の例ではおおくはない（たとえば、佐藤 1998: 52）。考古学という研究分野が、すくなくとも今日までは、直接、当事者つまりアイヌの人びとと接する機会が少ない、あるいは無いという理由から、そこに注意を払う必要はないということにはならないはずである。

なお、本研究は、2014年1月11日から13日まで、国立民族学博物館で開催された国際シンポジウム『北太平洋沿岸諸先住民文化の比較研究』において発表したものに修正を加えたものである。貴重なご意見を頂いた大塚和義氏、山浦清氏ほか参加者の方々、発表の機会を与えて下さった岸上伸啓教授に心よりお礼を申し上げます次第である。わたくしの構想では、渡辺仁先生のお仕事にふれたあと、現在の研究にまで言及する予定であった。稿を改めてふれたいと思う。

## 注

- 1) 2003年アルバータ州エドモントンでの筆者によるインタビュー。なお、この内容は、すでに出利葉（2005）において発表している。
- 2) ここでいう本道とは、北海道のことである。
- 3) 江戸時代のアイヌの農耕の段階のことを指す。
- 4) 「飛躍」とは、アイヌの人びとが明治政府により生活の「改善」を強いられたことを意味する。
- 5) 原書では明確な章立てはないが、ページのヘッダーに Ethnography and Folk-lore とある部分からはじまる。
- 6) 遅くとも著作が出版された1956年当時と考えておくことは誤りではないだろう。
- 7) 1965年当時のこと。

## 引用・参考文献

(和文)

稲生典太郎

- 197 「初出誌一覧と補注」稲生典太郎『北方文化の考古土俗学』東京：岩田書店。  
1936 「樺太アイヌの人形」『ミネルヴァ』1(7) (稲生典太郎1997『北方文化の考古土俗学』pp.101-113, 東京：岩田書店に再録)。  
1951 「江戸時代の文献に現れたるアイヌの農耕について」『古代文化』2・3 (合併号) (稲生典太郎1997『北方文化の考古土俗学』pp.77-99, 東京：岩田書店に再録)。

大塚和義

- 2011 「国立民族学博物館におけるアイヌ研究と博物館活動の過去・現在・未来」『国立民族学博物館研究報告』36(1)：113-141。

大林太良

- 1965 「歴史民族学の諸問題」『民族学研究』30(2) (斎藤忠編1986『日本考古学論集1 考古学の基本問題』東京：吉川弘文館に再録)。  
1976 「解題」鳥居龍蔵『鳥居龍蔵全集第7巻』pp.625-635, 東京：朝日新聞社。

河野広道・名取武光

- 1938 「北海道の先史時代」『人類学・先史学講座』第18巻, 東京：雄山閣 (名取武光 1972『アイヌと考古学(一)』pp.-141-179, 北海道出版企画センターに再録)。

木下 忠

- 1967 考古学研究における『民俗学的方法』『考古学ジャーナル』12 (斎藤忠編1986『日本考古学論集1 考古学の基本的問題』pp.209-221, 東京：吉川弘文館に再録)

木村信六

- 1939 「樺太石器時代の遺跡と遺物」『樺太時報』23, 豊原：樺太庁文書課 (木村信六「樺太石器時代の遺跡と遺物概観」木村信六・和田文治郎・林 欽吾1984『千島・樺太の文化誌』pp.77-100, 札幌：北海道出版企画センターに再録)。

小谷凱宣

- 1994 『フレデリック・スターのアイヌ研究資料の民族学的研究』名古屋：名古屋大学大学院人間情報学研究科。  
2004 「北米のアイヌ文化財調査」小谷凱宣編『海外のアイヌ文化財—現状と課題 第17回「大学と科学」公開シンポジウム発表収録集』pp.107-117, 名古屋：南山大学人類学研究所。

小谷凱宣編

- 1993 『在米アイヌ関係資料の民族学的研究』名古屋：名古屋大学教養部。

小谷凱宣・佐々木利和・切替英雄他

- 1993 「アメリカ合衆国東部と中西部の主要アイヌ・コレクション」小谷凱宣編『在米アイヌ関係資料の民族学的研究』pp.19-31, 名古屋：名古屋大学教養部。

小林知生

- 1976 「解題」鳥居龍蔵『鳥居龍蔵全集第5巻』pp.681-691, 東京：朝日新聞社。

斎藤 忠

- 1971 「学史上における坪井正五郎の業績」斎藤忠編『日本考古学選集2 坪井正五郎集—上巻』pp.2-12, 東京：築地書館。

佐々木利和

- 2010 「文化人類学はなぜアイヌを忌避したか—学問もまたアイヌを差別するか」北海道大学アイヌ・先住民研究センター編『アイヌ研究の現在と未来』pp.224-235, 札幌：北海道大学出版会。

佐藤宏之

- 1998 「狩猟のエスノアーケオロジー研究とは何か」佐藤宏之編『ロシア狩猟文化誌』pp.47-75, 東京：慶友社。

谷元旦

- 1991 『蝦夷風俗圖式』『蝦夷器具圖式』（復刻版）大塚和義監修，東京：安達美術。

坪井正五郎

- 1889 「日本考古学講義」『文』2(8,9) (斎藤忠編1971『日本考古学選集2坪井正五郎集—上巻』pp.15-29, 東京：築地書館に再録)。  
1892 「考古学と土俗学」『東洋学芸雑誌』9-124 (斎藤忠編1971『日本考古学選集2坪井正五郎集—上巻』pp.36-41, 東京：築地書館に再録)。  
1897 「考古学の眞價」『考古学会雑誌』1-8 (斎藤忠編1971『日本考古学選集2坪井正五郎集—上巻』pp.30-34, 東京：築地書館に再録)。  
1903 「序」鳥居龍蔵『千島アイヌ』東京：吉川弘文館。  
1910 「未開人種製作品の意匠」心理学通俗講話会編纂『心理学通俗講話』第二輯, pp.141-168, 東京：同文館。

出利葉浩司

- 1997 「20世紀前半におけるアイヌ社会の変容についての一試論—日米アイヌ・コレクションの比較を通して」小谷凱宣編『欧米アイヌ・コレクションの比較研究』pp.45-61, 名古屋：名古屋大学大学院人間情報学研究所。  
2002a 「人びとの出会い、コレクションの収集、そして展示へ」(財)アイヌ文化振興・研究推進機構編『海を渡ったアイヌの工芸—英国人医師マンローのコレクションから』pp.10-17, 札幌：(財)アイヌ文化振興・研究推進機構。  
2002b 「マンローコレクションについて」(財)アイヌ文化振興・研究推進機構編『海を渡ったアイヌの工芸—英国人医師マンローのコレクションから』pp.88-97, 札幌：(財)アイヌ文化振興・研究推進機構。  
2004 「欧米のアイヌ・コレクションの構成要素の比較」小谷凱宣編『海外のアイヌ文化財—現状と課題 第17回「大学と科学」公開シンポジウム発表収録集』pp.118-130, 名古屋：南山大学人類学研究所。  
2005 「アルバータ州にある二つの博物館の先住民族展示について—博物館民族学の視点から」『18世紀以降の北海道とサハリン州・黒竜江省・アルバータ州における諸民族と文化—北方文化共同研究事業研究報告』203-242, 札幌：北海道開拓記念館。

鳥居龍蔵

- 1903 『千島アイヌ』東京：吉川弘文館。  
1919 「考古学民族学研究・千島アイヌ (Etudes Archeologiques et Ethnologiques, Les Ainou des Iles Kouriles)」『東京帝国大学理科大学紀要第42冊第1編』（日本語訳は鳥居龍蔵1976『鳥居龍蔵全集第5巻』pp.311-553, 小林知生訳，東京：朝日新聞社に再録)。

名取武光

- 1936 「北日本に於ける動物意匠遺物と其の分布相」『北海道大学博物館報告』。(名取武光1972

- 『アイヌと考古学 (一)』pp.105-140, 札幌: 北海道出版企画センターに再録)。
- 1940 「噴火湾アイヌの捕鯨」『北方文化研究報告』3, pp.137-161 (名取武光1945『噴火湾アイヌの捕鯨』pp.1-31, 札幌: 北方文化出版社に再録。名取武光1974『アイヌと考古学 (二)』pp.95-118, 札幌: 北海道出版企画センターに再再録)。
- 1942 「アイヌ民族の精神生活」『北海道文化史考』日本放送出版協会 (名取武光1945『噴火湾アイヌの捕鯨』pp.33-61, 札幌: 北方文化出版社に再録。名取武光1974『アイヌと考古学 (二)』pp.199-220, 札幌: 北海道出版企画センターに再再録)。
- 新岡武彦
- 1930 「北海道『古代文字』研究並に沿革, 環状石籬に及ぶ」『北海道帝国大学新聞』58・59 (新岡武彦1977b『樺太・北海道の古文化2』pp.7-20, 札幌: 北海道出版企画センターに再録)。
- 1931 「土鍋について」『北方郷土研究』2 (1) (新岡武彦1977b『樺太・北海道の古文化2』pp.32-34, 札幌: 北海道出版企画センターに再録)。
- 1937 「樺太の内耳土器」『人類学雑誌』52(3) (新岡武彦1977a『樺太・北海道の古文化1』pp.40-55, 札幌: 北海道出版企画センターに再録)。
- 1975 「北蝦夷図説の土鍋」『北海道史研究』8 (新岡武彦1977a『樺太・北海道の古文化1』pp.204-209, 札幌: 北海道出版企画センターに再録)。
- 長谷部言人
- 1941 『内外土俗品圖集』東京: 寶雲舎。
- 濱田耕作
- 1922 『通論考古学』東京: 大鐘閣 (1984東京: 雄山閣より復刻)。
- 馬場脩
- 1937 「千島群島出土の狩獵具及び漁具」『民族学研究』3 (2) (馬場脩 1979a『樺太・千島考古・民族誌2』pp.128-173, 札幌: 北海道出版企画センターに再録)。
- 1940a 「日本北方地域及び附近外地出土の『内耳土鍋』に就いて」『人類学・先史学講座』14 (馬場脩1979b『樺太・千島考古・民族誌3』pp.163-266, 札幌: 北海道出版企画センターに再録)。
- 1940b 「樺太の考古学的概観」『人類学・先史学講座』17 (馬場脩1979a『樺太・千島考古・民族誌2』pp.9-127, 札幌: 北海道出版企画センターに再録)。
- 林欽吾
- 1984 「日本北辺の内耳土器」木村信六・和田文治郎・林欽吾 1984『千島・樺太の文化誌』pp.215-246, 札幌: 北海道出版企画センター。
- 古谷嘉章
- 1998 「異種混淆の近代と人類学」『現代思想1998年6月号』26(7): 92-105。
- 八幡一郎
- 1962 「狩獵生活」江上波夫・水野清一編『世界考古学大系第16巻 研究法・索引』pp.144-152, 東京: 平凡社。
- (欧文)
- Childe, V. G.
- 1956 *Piecing Together the Past: The Interpretation of Archaeological Data*. New York: Frederick A. Praeger (チャイルド, G.V. 1964『考古学の方法』近藤義郎訳, 東京: 河出書房)。

Deriha, K.

- 2013 Trade and a Paradigm Shift in Research on Ainu Hunting Practices. In M. Hudson, A-E. Lewallen and M. Watson (eds.) *Beyond Ainu Studies: Changing Academic and Public Perspectives*, pp.136-149. Honolulu; University of Hawaii Press.

Munro, N.G.

- 1962 *Ainu Creed and Cult*. London : Routledge & Kegan Paul.

Vanstone, J.

- 1993 The Ainu Group at the Louisiana Purchase Exposition, 1904. *Arctic Anthropology* 30(2) : 77-91.

Yamada, T.

- 2003 Anthropological Studies of the Ainu in Japan: Past and Present. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 4 : 75-106.